

編集後記

-- 1 --

昨 2018 年 7 月に西日本を襲った豪雨災害から、はや 8 か月。私の暮らす四国愛媛県大洲市の大川地区（人口 700 人余り）は、愛媛一の流域を誇る肱川とともにある山村地域だ。初夏には川の両岸に鯉のぼりを架け渡し、夏にはカヌー、秋には落ち鮎を狙った瀬張り漁と、土地の人々は肱川という地形・環境にそった暮らしを楽しんでいる。

肱川には現在 2 つのダムがあり、今年の豪雨時には国交省のマニュアルどおり満水まで待って、「異常洪水時防災操作」を行った。安全とされる 6 倍もの大水が一気に流れ落ち、ダム直下の町を押し流し、低地を中心に市内で 2,000 棟以上が浸水した。山の上にあるわが家は難を逃れたが、地元の仲間とともに、地域活性化の拠点として整備中の 2 階建て古民家（旧大石邸：元醤油醸造元本店）は 1 階の天井まで水が流入し、醤油店時代の貴重な書類も流失した。大川地区では橋が流され、理容店の男性一人が命を落とし、住む家を失った人たちは町に移った。地方で起こる災害は過疎化を速める。

肱川は長さ 104km。源流から河口までの高度差が 400m 強と勾配が非常にゆるやかなわりに、河口部では両岸に山が迫り川幅が狭くなる。そのため流域に豪雨があると、昔から洪水を起こした。大洲藩政時代には、川岸にマダケ、その内側にはエノキを植えて、洪水の流れから肥沃な水だけを濾しとり、大きな漂流物が遊水池でもあった田畑に入らないようにしていたと聞く。他にも「ナゲ」という石積みの構造物を岸から川の中に向けて築き、川の流れを調整するとともに舟運の船着き場にしてきた。先に紹介した古民家（旧大石邸）が肱川沿いにあったのも、舟運を利用していたからである。醤油の主原料である大豆や小麦は地元で調達できても、塩は海から運ぶしかない。また、作った醤油も肱川を船で下って、南予（愛媛の南エリア）のおもだった港に運んでいたはずだ。

私が本冊子の編集をお手伝いするのは今回が最後となる。先日、高校で生物の教師をしていた H さんと話していると、「民族植物学」の言葉が出た。話題になったのは「バショウ」である。バショウは南方のものだが、南予では海沿いではなく、見かけるのは山間地だけである。では、山間地の人がそれを何に用いるかというところ、お盆に仏様を迎える盆棚をこしらえるとき、大きなバショウの葉を敷く。これ以外に用途がないようにみえるのがとても気になる、とのことだった。（そういえば、私の家にも小さな沢近くにバショウがあり、お盆の時だけ利用しているが、この慣習を不思議に思うことはなかった。）南予の山の中に薩摩島津家ゆかりの大きな寺があり、この寺が南国の薩摩からバショウを移植したのではないだろうか、というのが H さんのルーツ仮説である。

肱川の治水についても、お盆の棚づくりにしても、人は身の周りの自然物を利用して来た。帰郷間もない 2012 年から 2 年間、生物の恵みを五感で感じる「内なる生物多様性」をテーマに市民大学の授業づくりに携わったときから、私は人々が植物をどう利用しているか調べて図鑑（事典）にしたいという夢を持っている。インターネットを活用して全国から情報を集め、知の事典をつくることはさほど難しくはない。いや、もうどこかで始まっているかもしれない。でも私は、この事典はじっさいに植物を利用している人に出会って、そこに染みついている歴史を記録することこそが大切だと思っている。「民族植物学ノオト」に縁をいただき、大きな世界と出会うことができた。

宮本幹江

(2019.02.25)



